

「障害児体育の実践・アラカルト」

このところ実践らしい実践をしていないのにこのコーナーを引き受けてしまった。別に授業に手を抜いているわけではない。支援学校で「わかる・できる」を追求するには時間の保障も必要であり、とにかく運動会の取り組みやマラソン大会に向けての持久走の取り組みには時間がかかった。また、初任者の体育科教員が私の学年に所属となり、彼女には秋のゴールデンタイム(?)を実践研究の期間として使ってもらった。卒業式の練習が始まると体育の時間は他学部に迷惑をかけることなく体育館を使用できる時間となり、授業がなくなる。というわけで、私はたまに1~2時間パッと湧いた体育の時間を消化試合のようにこなしているのである。継続した積み重ねはできないが、子どもにとって消化試合では許されない。1回の授業に「わかる・できる・文化性のある」中身を凝縮しようと悩みながら取り組んでいるところである。

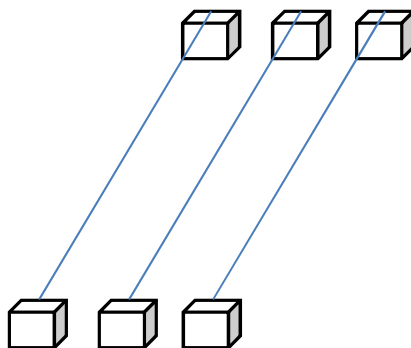
ゴムひもの授業

一本のゴムひもを地面から5cm程度浮かせてピンと張る。多くの子どもはこれだけでゴムひもを飛び越すという課題が理解できる。軽くジャンプするだけで飛び越せるから、連続ジャンプも行いやすい。連続両足ジャンプでスキーのウェーデルンのようなパフォーマンスを示す子もいる。

だが、そのような話を以前全国大会でしたら、強い批判を浴びた。「サーキットと一緒に」「やらせてるだけ」etc.

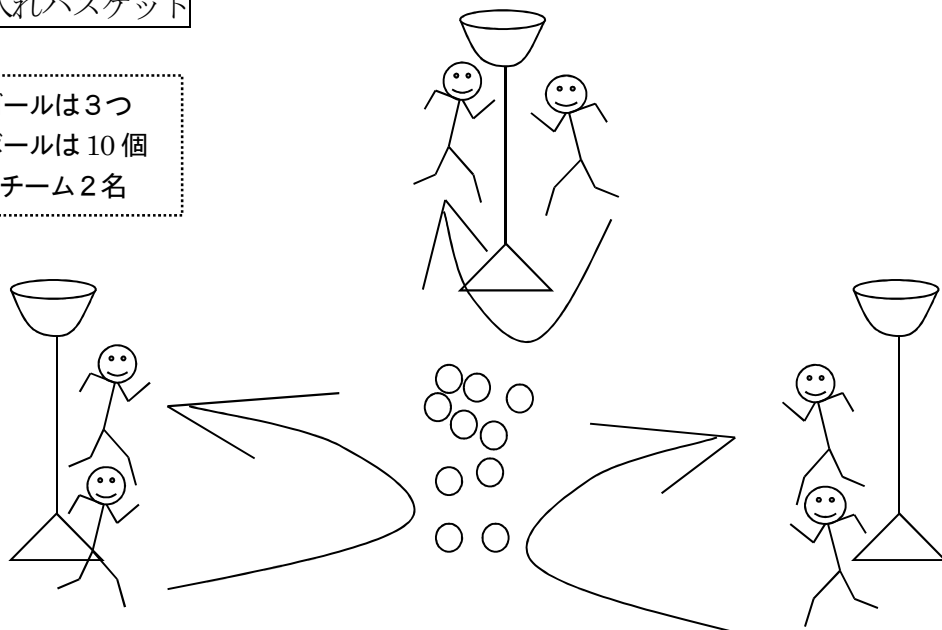
たしかにそうだ。「わかる・できる」ことのみを目を奪われ、「子どもが味わう」という視点が全く抜け落ちていた。そこで今回はバンブーダンスの音楽を取り入れ、リズムよくゴムひもの間を飛び跳ねていく、という課題に変えてみた。……それが正解だった。ゴムひもを飛び越すという単調な課題から、音楽に合わせてゴムひもに規定された空間でどのように自分を表現するかという課題に学習内容が変化したのである。

音楽に合わせてダイナミックに飛び越したり3本のゴムを自由な順番で飛び越したり、動きの質が、そして取り組む表情が変わってきた。ジャンプの難しい子には片足ずつまたぐようなステップの方法を示してみた。バンブーダンスの曲に合わせたステップは軽やかで自然に滑らかな動きを導き出しているかのようだ。



玉入れバスケット

ゴールは3つ
ボールは10個
1チーム2名



2年前に取り組んだことのある実践を最後の体育授業に持ち込んでみた。届きそうで届かない高さのゴールは子どもたちに調整する力を必要とさせ、レイアップシュートのようないい動きが2年前はよく出ていた。ところが、2年後にやってみると・・・きれいさっぱり忘れてる！

シュート練習から復習でやってみる。すると、思い出すのも結構早かった（少し、ほっとした）。さっそく3ゴールでの玉入れバスケットのゲーム。ゴールを3つにしたのは人数の加減が最大の理由であるが、取るかとられるかといった競争的要素の強い2ゴールよりは乱戦によるチャンスがあり、楽しむことができる。

子どもたちの様子を見てみると、1個目のボールは余裕。失敗しても落ち着いて何回も入れなおしている。ところが2個目のボールは限りがあり、人に向き合う力を持った子は他者のボールを取りに行くが、人と向き合うのが苦手な子はあっさりボールを取られてしまったり、ボールを抱えたままゴールに近づけなかったりする。そんなとき最後の1個のボールを教員がチャンスに恵まれなかった子に絶妙のタイミングで渡したり、競い合っている子の真ん中に置くなどさじ加減をして（神の手）、学習課題の場を創出する。このような場面設定が支援学校ならではの支援ではないかと私は考えている。

最後は教員2名対生徒5名の2ゴールでのゲーム。いくら教員でも2対5ではやや生徒の方が有利になる。「誰と勝負したい？」なんて聞くと、好きな先生を選びたがる子や、逆にわざと年輩の教員を選び勝ちを目指そうとする子がいたりして盛り上がる。

そして、不思議なもので、友だちには遠慮がちにボールを取りに行っていた子も教員相手だと容赦ないものである。ボールに食らいつく動きはちょっとしたディフェンスになっている。夢中になった子どもたちはいろいろなことを見せてくれる。